筑紫女学園大学リポジト

The Teaching Practice of Music in Child Care Person Training Programs : The Achievement of Student's Musical and Child Care Ability

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 今釜, 亮, IMAGAMA, Ryo
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/41

保育者養成における音楽の授業実践

― 総合的な音楽力と保育力の育成を目指して ―

今　釜　　亮

The Teaching Practice of Music in Child Care Person Training Programs

― The Achievement of Student's Musical and Child Care Ability ―

Ryo IMAGAMA

１．はじめに

保育者養成校においての音楽系科目の目的は各校において様々であろう。本学本科においては、個人の技能の育成はもちろんのこと、音楽を介して人前で発表する経験や協働して物事を行う力を徐々に養い、実習や採用試験に備え、そして卒業後に保育者になった時のための準備の時間として考え教育に当たっている。

対して、学生からすると音楽系科目は重圧の対象となりうる。他科目も当然そうであるが、高校生までに習ってきた内容と全く違う内容を学ぶことに起因する。特にピアノについては全く習ったことが無い学生も含まれ、実技を伴うことになるので、学生の精神的時間的負担はかなり大きい様子である。しかし保育者になるために避けては通れない道であることも事実である。

本稿では、音楽系の授業が学生の保育力の養成にどう影響しているか考察する。

２．入学までの学生の状況

まず、入学してきた時の学生の状況に目を向ける。オープンキャンパス時に相談の内容は、体感的にであるが、保護者高校生共にピアノに対して質問が多く不安が大きいことが伺える。内容は、入ってからついて行けるのか、予め習っていた方が良いのか、どれ位練習したら良いか、といった相談が多い。その中で、どれ位経験を積んで入学したかを示すため入学時のピアノの経験年数を表１にまとめた。

表１．入学者のピアノ経験年数

入学年度	10年以上	３年以上10年未満	１ヶ月以上３年未満	経験無し
平成22年	18	40	28	19
平成23年	18	32	27	15
平成24年	25	33	33	16
合計	61名	105名	88名	50名
%	20.1	34.5	28.9	16.4

これは後述の音楽Ⅰ（器楽）のグレード分けのため、入学直後のオリエンテーションで調査しているものである。中には小学校の時少し習っていたという学生も含まれるのでやや強引であるが、小学校中学年より前から習って10年以上経験がある上級者、高校入学前から習っている３年以上経験の中級者、保育者養成校に進路を決めてから習い始めたと推測される３年未満の初心者、全く経験無しで入学してきた学生の４つに分類した。

この結果を見てみると、１ヶ月以上の経験者が73.6％となり、元々習っていたか、保育者志望と進路を決めてから習いだした事が分かる。特に、高校入学前は未経験であったろう初心者と未経験者を合わせた全体の45.4％の学生の内３分の２の入学生は、意識を持って入学前から取り組む姿勢を見せている。

３．保育現場でのピアノの必要性

2011年の全国消費実態調査では全国のピアノ普及率は約25％[1]と世界でもかなり高水準である。また、ミキハウス子育て総研の調査で未就学児の習い事で、ピアノは19％でスイミングに次ぎ２位、リトミック・音楽教室は11.8％で４位[2]と、音楽に子どもを触れさせたいと願う保護者が多いことが伺える（無論、子ども自身が習いたいというケースもかなり多いだろうが）。なお、ピアノが19％というのは前項で述べたピアノ経験年数10年以上の割合20.1％とほぼ一致し、特段幼少の頃のピアノの経験が保育者への進路希望と関連しないことを裏付け、興味深い。

近年、関東地方を中心に少しずつピアノから脱却した保育が試みられているが、高度成長期時代に日本人の文化として定着したピアノはもうしばらくは大きな影響を与えるであろう。

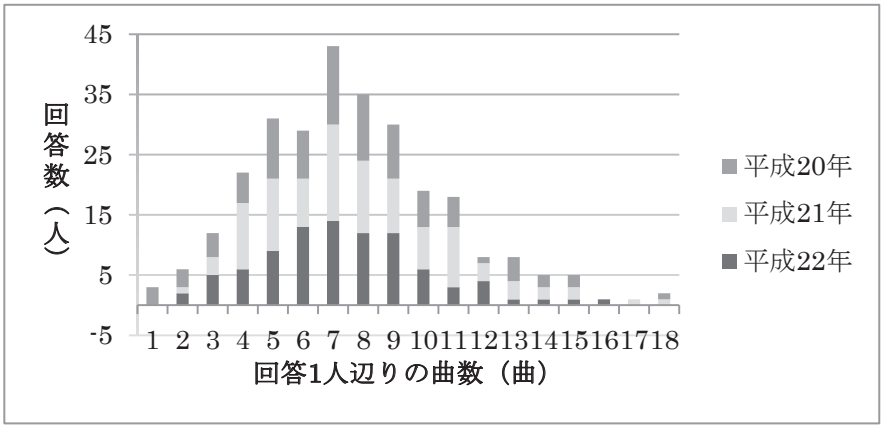
学生の視点で見たときにピアノの技能が必要になってくる場面は３回、すなわち実習、採用試験、就職後の保育である。当然、保育者になった後の方が必要なのであるが、学生自身は目の前の課題として、短期的に実習のため、採用試験のためのピアノという意識が強い。

３．１　実習時のピアノ

本学本科において、幼稚園第二種免許及び保育士資格取得希望の学生は、１年次２月３月に保育所と施設に、２年次５月に幼稚園実習の１回目、８月に保育所実習の２回目、９月に幼稚園実習の２回目、合計５回の実習に行くことになる。その中で５月の幼稚園実習時に絞り、学生に子どもたちがどんな曲に触れていたかのアンケート調査を行った。[3]表２は子どもが２週間の間に何種類の曲に触れていたかの結果である。８割を超える回答が４曲～ 11曲の間に集中しているので、ほとんどの園が毎日複数曲を園児に歌わせていると考えて良いだろう。実習のスタイルにもよるが、実習生に部分保育を促す園では、実習生自身数曲弾いている。

また、佐藤敦子氏が2003年に保育士養成校に対して行った調査で、「実習時にピアノ実技が必要とされる割合」は、保育所で「かなり必要とされている」「ある程度必要とされている」を合わせて67.8％、幼稚園では「かなり必要とされている」「ある程度必要とされている」を合わせて97.4％という数字を示している。[4]

表２．実習時に子どもが触れた曲数



実際に弾いたかどうかについては詳細な調査が必要であるが、実際に曲に触れる機会が多いことから、学生自身は準備するべきだと感じており、教員も学生に準備するよう指導している。

３．２．採用試験時のピアノ

では採用試験時のピアノはどうであろうか。平成19年から21年の保育園の採用試験の音楽の試験の有無を表３に、幼稚園の状況を表４に示す。なお、表３表４について、19年、20年は短大幼児教育科のみ、21年は幼児教育科に文学部発達臨床心理学科の数字も含む。

表３．保育園採用試験時の音楽の試験実施状況

年度	試験有	試験無	総数	%
19年	60	13	73	82.2%
20年	63	18	81	77.8%
21年	131	38	169	77.5%
合計	254	69	323	78.6%

表４．幼稚園採用試験時の音楽の試験実施状況

年度	試験有	試験無	総数	%
19年	53	7	60	88.3%
20年	38	8	46	82.6%
21年	109	12	121	90.1%
合計	200	27	227	88.1%

これは、実際に音楽試験があったかどうかの数字であり、実際に実習に行ったり自主実習に行ってピアノを弾いたので試験が面接だけだったようなケースは含まれていない。仮に本実習や自主実習で全ての実習生がピアノを弾いていると仮定すると、保育園採用時の音楽試験の割合は88.9％、幼稚園採用時は93.4％となる。

どちらの数字も、学生にとっては１園の受験で採用されなかった場合２園目は必ず音楽の試験があると思って取り組んだ方が良い数字であり､教員側もそれに対応したカリキュラムを組んでいる。

４．音楽系授業概要

それでは、どのようなカリキュラムを組んでいるかを示していく。幼児教育科において、音楽関係の授業が表５の通り開講されている。

表５．音楽系授業の開講状況

１年前期	１年後期	２年前期	２年後期
音楽Ⅰ（声楽）	音楽Ⅱ（声楽）	音楽Ⅲ（※通年）	音楽Ⅲ
音楽Ⅰ（理論）	音楽Ⅱ（理論）	保育内容の研究（表現Ⅱ）	
音楽Ⅰ（器楽）	音楽Ⅱ（器楽）		

※平成24年度より音楽Ⅲと音楽Ⅳに分割

音楽Ⅰ関連が卒業必修、保育内容の研究（表現Ⅱ）が保育士資格及び幼稚園第二種免許取得の必修科目であるが、その他は選択科目である。選択科目にも関わらず、音楽Ⅱは例年99-100%、音楽Ⅲは95%前後の学生が履修をしている。これは当然ながら強制したものではなく、学生自身、音楽が保育において必要な技能と考え、前項で示した通り実習における不安の解消や、採用試験に向けての努力の必要性を感じている結果と考えられる。

本科は１学年100名定員、１クラスは50名の２クラスで構成され、各科目ともクラス毎に開講される。声楽科目（音楽Ⅰ（声楽）、音楽Ⅱ（声楽））は各クラス教員２名によるグループ授業、理論科目（音楽Ⅰ（理論）、音楽Ⅱ（理論））と保育内容の研究（表現Ⅱ）は教員１名によるクラス授業、器楽科目（音楽Ⅰ（器楽）、音楽Ⅱ（器楽））と音楽Ⅲは学生６名当たり１人の教員が90分の授業を受け持ち、個人指導を行っている。全体の方針としては、１年前期は基礎力、後期は基礎から応用へ、２年次に総合力を身につけることを目標としている。

４．１．声楽分野

前期は、こどものうたに適した頭声発声を基本に、発声練習を重視する。教材は音域が狭くリズムも簡素で学生も既知かつ興味を持つこどもの歌から入る。知っている曲でも階名唱（固定ド）でまず歌い、ソルフェージュ力も同時に養っていく。

発声については、「姿勢」「響き」「呼吸」を軸に授業を行っている。これは学生が保育者となり人前で立ち、話していく技術にも繋がることである。子どものうたを歌うのに特化するため、特に「響き」について重視しており、地声にならないよう鼻腔共鳴を徹底している。メリットとしては、声帯への負担が小さい、発語がはっきりする、子どもへの威圧感が無く安心できる、音程が安定する、などが挙げられる。

曲目は当初５回程度は、未満児（０～２歳児）で利用頻度が高い曲から以上児（３～５歳児）で利用頻度が高い曲を利用する。そのことにより、少しずつ曲の音域が広くなり、音程の跳躍が増え、曲が長くなり、フレーズが長くなり、ピアノ伴奏が複雑になる。また、季節のうたや行事のうた、手遊びうたの説明も随時加えていき、保育者として必要な知識を身につける。

ある程度基礎を固めたところで、「コンコーネ」の第13番を用い中間試験を行う。また同時期に

３人１組で簡単な模擬授業を行い、人前で何かをするという経験を早期に積む。高校生までに、人前で話す経験や何か動作を行う経験が希薄な学生は案外多い。前期中に３人１組で行うことで心理的負担を少し軽減し、実習に向けての準備の第一段階としている。その後に音感を養うために合唱を行う。これは、他者と自分の声が混じることにより、更に発声の技術を深めていくこと、自身の音程を作り出す技術や音量を増していく技術を高めていくことが目的である。この延長線上で定期試験では３人１組でカノンの作品を歌い、協働していく力と耳を使う力を少しずつ養う。

ここまでで、入学した頃はC５～C６程度の音域だった学生が、概ねC５-F６程度まで音域が拡張されている。

１年後期は前期身につけた技能を基に、オペレッタ（簡単な音楽劇）とミニコンサートに向けた合唱を２本柱にしている。オペレッタの最大の目的は協働して物事を行うことである。保育は１人でやるものではなく、園全体そして保護者と協働して行っていく。また、各園必ず生活発表会があるため劇を行うことが多々ある。子どもに教授することはもちろん、保育者自身が子ども向けの劇をすることは少なくない。この背景も踏まえた、実質的な目的も当然ながら重要と考えている。

クラスを１グループ10人強で分け展開する。詳しくは表６に示す学生に配布する資料の通りだが、題材は自由、15分以内、３曲以上の歌を入れる、内最低１曲は３重唱（三部合唱）を入れる、大道具は作らない、小道具も最低限に、という制約の中で進めていく。理論の授業でも時間を取り、合わせて10回の授業で仕上げていくが、基本的に教員は見守り、学生自身が考え行うこととしている。ただし、毎回の授業で日誌を提出することを班毎に義務づけている。簡単なものであるが、班長、音楽係、台本係、演出係などの役割分担を誰がするかや、毎回の活動の内容、問題点、収穫を提出させ、教員の所見を書いて次回授業で返却している。これは、将来的に実習日誌を書くようになったときの準備ステップとしている。また、教員は選曲や曲の仕上げ、演出の方法など必要な時のみ手助けと、本番前週のリハーサルチェックを行う。更に、技術的なポイントとして、15分間の話を展開するにはどれ位の分量のストーリーが必要なのか、パフォーマンスの基礎である動きの意味やキャラクターの確立、聴衆の方を向いて通る声で分かりやすく話す、などを重点的に直接伝えたり示唆をしたりしている。内容決めや練習などは自分たちで行うため、自由度が高く苦労するが、学生自身の達成感は非常に大きい。

2011年度の学生の感想を見ると「１つのことをみんなで協力し合いながら、完成させていく大切さを改めて学べた」「自分たちらしさを見つけることができた」といった内容が目立つ。

表６．オペレッタに関する学生配付資料

オペレッタ制作の流れ

2012年後期

声楽(月)	理論(水)	係決め	演目決定	台本	曲決定	セリフ 読み合わせ	音楽練習	通し稽古
9/24		○	○	○				
	9/26		○	○	○	○		
10/1				○	○	○	○	
	10/3				○	○	○	
10/8						○	○	○
	10/10						○	○
10/15								○
	10/17							○
10/22		**リハーサル**						
	10/24	**リハーサル**						
10/26		**オペレッタ本番(木曜日)**						

各項についての留意点

演目
・15分以内であること

読み合わせ
・流すのでは無く、覚えるために

技術面の確認
・声の大きさ　・表情
・キャラクター　・歌、音程
・話の長さ　・転換、見え方

歌
・3曲以上入れる
・最低1曲は3重唱を入れる
・編曲が必要な場合は早めに相談する
・レッスンを適宜受ける

演出
・セリフが部屋の後ろまで聞こえるように、ゆっくりめに
・しゃべる時は必ず前を見て
・動きはオーバーに
・舞台を横にうまく使い、カーテンも活用する

ミニコンサートについては後述するが、１年生の合唱はクラス単位で行う。オペレッタの時は少人数で協働することを学んできた訳だが、今度はクラス全員となるため、時にはぶつかりあい、揉めながらも協働していくことを大きく学んでいく。曲目については２曲教員が提示する。曲は無伴奏曲または民族性を感じさせるわらべうた、日本内外の民謡あるいは両者を兼ね備えた１曲と、メッセージ性があり、学生自身の表現欲求を高められる１曲を選曲している。５回の授業で練習を行い、授業の一環としてミニコンサートの中で発表をする。

練習は学生の中で２名の指揮者とピアニストを決め、進めていく。パート練習でピアノが弾ける学生が少ないとか、どうしても音が取れない時には教員が補助を行い、４回目の授業の辺りで教員が短時間だけ直接指導をする。この短時間の練習で、完成形を想起させ、表現するには何が足りないのか更に考え工夫するようになっていく。また、５回目の授業では実際に発表を行うホールで練習を行い、録音を録ってその場で聴きフィードバックする。「何をするべきか」ということに対し客観性を持つのはこの時である。事後の感想では「団結」「上達」「意識変化」と言ったキーワードが見られ、オペレッタより更に技術的に精神的に大きく成長する機会となっている。

試験について、独唱曲を無伴奏で１人で歌い、総合的な歌唱力を判断している。学生の成長を見た時、音域的には前期までとあまり変わりが無いが、言葉の捉え方、フレーズの長さ、音量、そして何より表現力の著しい向上が見られる。

４．２．理論分野

１年前期では、まず楽譜の読み方そしてリズムの取り方を中心にしている。特にリズムでは、リトミックに繋がるよう身体表現を伴いながら授業を行う。またハ長調、ヘ長調、ト長調における簡単な三和音（CFG、FB♭C、GCD）のコードも学び、旋律に対して簡単な伴奏付けができるようになることを目的としている。

後期では前述のとおり、最初の５回は声楽の時間と合わせてオペレッタに取り組む。その後は前期で学んだことを応用させ、コード弾きにおける左手伴奏の様々なリズム変化や、簡単なリトミック運動を行い、実践的な内容を目指している。

４．３．器楽分野

前期の教材は「大人のためのテクニックマスター」「バイエル教則本」「ブルグミュラー・25の練習曲」を利用し、どの教材も全曲は使わず抜粋している。具体的には「大人のためのテクニックマスター」は35曲、「バイエル教則本」は65番以降音階を含め27曲、「ブルグミュラー・25の練習曲」は４曲を弾く。全学生が全てを弾くわけではなく、後述のグレードによって弾く曲は変わる。また、最初の２つの教材の間に、学生が興味を引くことと練習曲以外の曲を弾く訓練のために『ハイ・ホー』『おおスザンナ』『君をのせて』などピアノピースを挿入している。

特に初学者において苦労する分野なので、推薦入学者のみであるが「大人のためのテクニックマスター」「バイエル」を教材に使うことを事前案内し、入学前学習を行うことを推奨している。推薦入学者の入学後の手助けになることが、一般入試などで入学する学生にも良い影響を与えている。

授業は学生の能力に合わせたグレード制を導入している。初回授業で、学生は「大人のためのテクニックマスター」「バイエル教則本」の中から任意の１曲を弾き、「２.入学までの学生の状況」で記したアンケート調査と合わせて教員が判定する。Ａ、Ｂ、Ｃの３グレードに分けられ、Ａグレード（初心者想定）はバイエル80番修了、Ｂグレード（ピアノ歴３年以上を想定）はバイエル100番修了、Ｃグレード（上級者）はブルグミュラー練習曲前半が弾けることを目標にしている。各グレードは連続しているため、規定曲が終了するとアップグレードすることが可能であり、学生のモチベーション上昇に繋がっている。

前期で学生が弾く、挿入曲含めた曲数はＡグレード59曲、Ｂグレード37曲、Ｃグレード24曲となる。曲の難易度が違うので学生が準備できる曲数はグレードが上がるほど少なくなるが、オリエンテーションや試験曲のための授業を除いた13回の授業で規定を終わらせるためには、Ａグレードが５曲、Ｂグレードが３曲、Ｃグレードが２曲を１回の授業で進めなければいけない。特にＡグレードの学生はグレードアップしていくことを目指していく学生が多いので、１回で７曲程度仕上げていく学生も見受けられる。他の学生との競争意識も働くのであろうが、目の前の課題をクリアしていくことで進んでいくこと、弾く技術が身に付いてくる実感が、学ぶモチベーションになっている。

後期は前期のグレードを引き継ぐ。Ａグレードはバイエル100番の修了を、Ｂグレードはブルグミュラー前半、Ｃグレードは後半の２曲を最初の目標とし、共通してこどものうたの伴奏に取り組む。また、前期同様ピアノピースを挿入し、更に仏教聖歌も弾く。こどものうたの規定曲の決定は、

１年生の２・３月に行く保育所実習を想定しており、前述３．１「実習時のピアノ」で述べたアンケート同様の調査を保育所実習終了後に行い、よく使われる曲を精査し教材としている。このことは学生にとって実習の不安を取り除く１つの材料となっており、事後のアンケートでは「園から急に言われて困ったが、授業でやって弾ける曲があったので良かった」という回答が多く目立つ。

曲数はＡグレード33曲、Ｂグレード23曲、Ｃグレード25曲となる。グレードアップした初心者の学生の中には、前期から夏休みにかけてコツコツ練習した成果が、後期辺りから突如花開き、中級者の学生と肩を並べて引く姿を見ることがある。

授業目的はピアノの技能だけではなく、個人として教員と接する場合の態度やマナー、授業外学習の習慣化、集中力の養成、試験など緊張を乗り越える訓練なども意図している。

４．４．音楽Ⅲ

２年生科目、音楽Ⅲは歌・コード・ピアノを総合的に学び、弾き歌いを主に行う。教材は前述の器楽科目と同じように、５・６月及び９月の幼稚園実習、８月の保育実習に即した弾き歌いの曲を多く使う。また、ピアノに特化した形で、採用試験対策としてクラシカルな曲を１曲仕上げている。初学者はギロックなど、上級者はショパンなど幅広い選曲を教員と学生が話し合って決め、学内のホール（600人程度収容）で演奏する。かなりの緊張を持って弾くが、乗り越えた時の精神的成長は著しい。この学内演奏は12月に公開で行うミニコンサートでピアノ演奏をする学生を選抜する目的もある。選抜者は８名前後であるが、これに選ばれることを目標にする学生も多い。歌については歌唱指導の方法について、実習や就職に向けて学ぶ。単純なことであるが、子どものうたのピアノ伴奏を弾きながら「さんはい」と合図を出す練習をするだけでも、学生の安心感は取り除くことができる。コードについては、１年次の基本三和音の復習として、ハ長調におけるCFGのこと、伴奏形のことを確認し、セブンスコード、両手伴奏について学ぶ。実践的には保育現場でコード弾きができた方が準備の期間ははるかに短く済むのであるが、１年次はそのコードを理解するだけの力が整っていない。ピアノを楽譜通り弾く力が付き、理論的なことを一通り学んだ２年生になって、ようやくコード弾きの重要性を理解できるようになる。

２年生ではグレード分けを行っていない。当たり前のことであるが、実習先や保育現場にいる子どもたちは、前に立っている保育者を「この先生はピアノが弾ける」「あの先生は弾けない」という視点では見ない。少なくとも１年は学び初心者では全員無くなるので、全員が同じ規定曲数、（前期は自由曲を除いた21曲、後期は29曲）を弾くよう指導している。ただし、進度が速い学生については、10曲多く（前期31曲、後期39曲）を仕上げることによって、定期試験の点数に加点を行っている。このことは上級者にとっては大きなモチベーションになっている。また、実習先で渡された曲や採用試験で弾くべき曲も任意で授業を受けることが可能である。このことによって実習や採用試験での不安を軽減することができている。

２年次の終わり頃に、初心者でも粘り強く学んできた学生の中には、クラスでトップクラスの成績を取ることがある。このことは他の学生にかなり大きな刺激を与えている。

４．５．保育内容の研究（表現Ⅱ）

情景・身体表現・リトミックといった観点から音楽劇を組み立て・創作・練習・発表することを目的として授業を展開していく。４．１「声楽分野」で述べたオペレッタ発表と同様、役割分担や協働も重要な要素である。

クラス毎に発表を行い、2012年度は近隣の保育所から年長児が観覧に来ることを前提に進めた。従って、題材は５歳児が楽しめ学べるもの、30分以内、音楽を随所に使うこと、大道具小道具も作ることとしている。50人での協働は学生にとって負担もあるようだが、保育者を目指す彼女らにとって、子どもを楽しませるにはどうすれば良いかを直接的に体験できる機会なので、質量とも素晴らしい発表となっている。

４．６．ミニコンサート

ピアノ演奏と合唱で構成される１時間半ほどのコンサートである。ピアノ演奏は前述の通り２年生の選抜者が、合唱は１年生の各クラスと２年生の各クラスが出演する。２年生の合唱出演は任意であるが、採用試験の最中で忙しいにも関わらず、毎年出たいと申し出があり、授業と関係なく学生のみで準備をしている。２年生の選曲は学生に任せているが、Jポップの編曲の割合が高い。稀に自作曲をやりたいという事があり、その際は教員がアドバイスしながら１名または数名の学生が協働しながら作曲をしていく。参考までに、末尾に2010年に２年生３名が作成した曲の冒頭を掲載する。

事後の１年生の感想を見ると、ピアノについて「すごい」「自分も来年目指したい」とモチベーションアップに繋がっていると見られるコメントが目立ち、そしてほとんどの学生が「２年生の合唱に感動した」と述べており、良い意味での伝統が作られていくのを感じることができる。

５．総合して

１年次は器楽分野で個人の力を、声楽・理論分野で集団の力を並行して付けていくことで、個人の力で足りないことは協働すれば解決できるということを少しずつ学んでいる。２年次は保育において必要な物が実際に見えてきているので、単位取得は難しくても自身の保育者になると言う目標のために頑張ろうという姿勢と、協働することや努力することで得られる達成感や楽しさを求めている姿が浮かび上がる。

結果として、高校生までに培われることが少なかった、常日頃から準備する姿勢、毎日の授業外学習、向上心、協力姿勢、協働するためのコミュニケーション力、サポートする力などを音楽の授業の中で、自己で気付き、身につけて卒業している。これらのことは保育者にとっては当然無ければならない資質の数々であり、ある意味現場では技能より求められるものである。

今後も更に資質向上のため何が考えられるか、工夫していきたいと考えている。

付記）本稿の一部は全国保育士養成協議会第51回研究大会　研究発表論文集に掲載（口頭未発表）された。

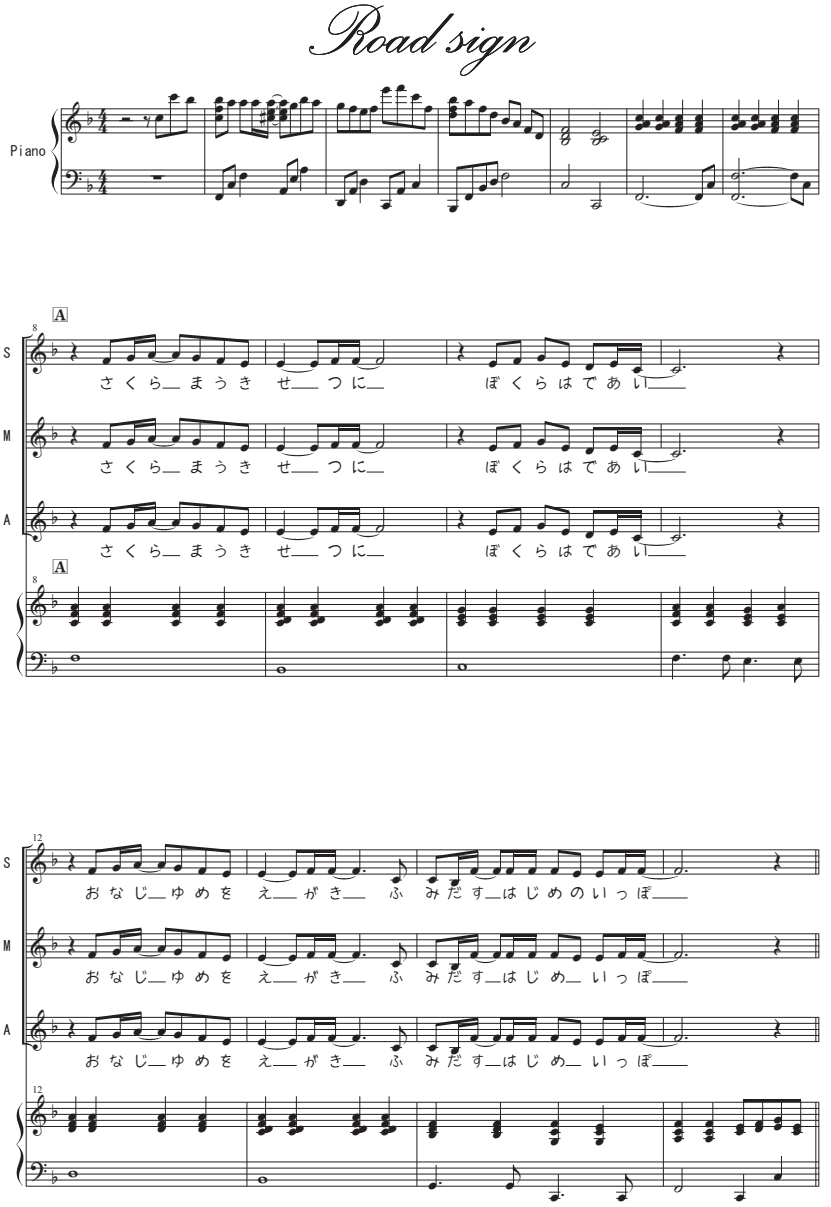
注

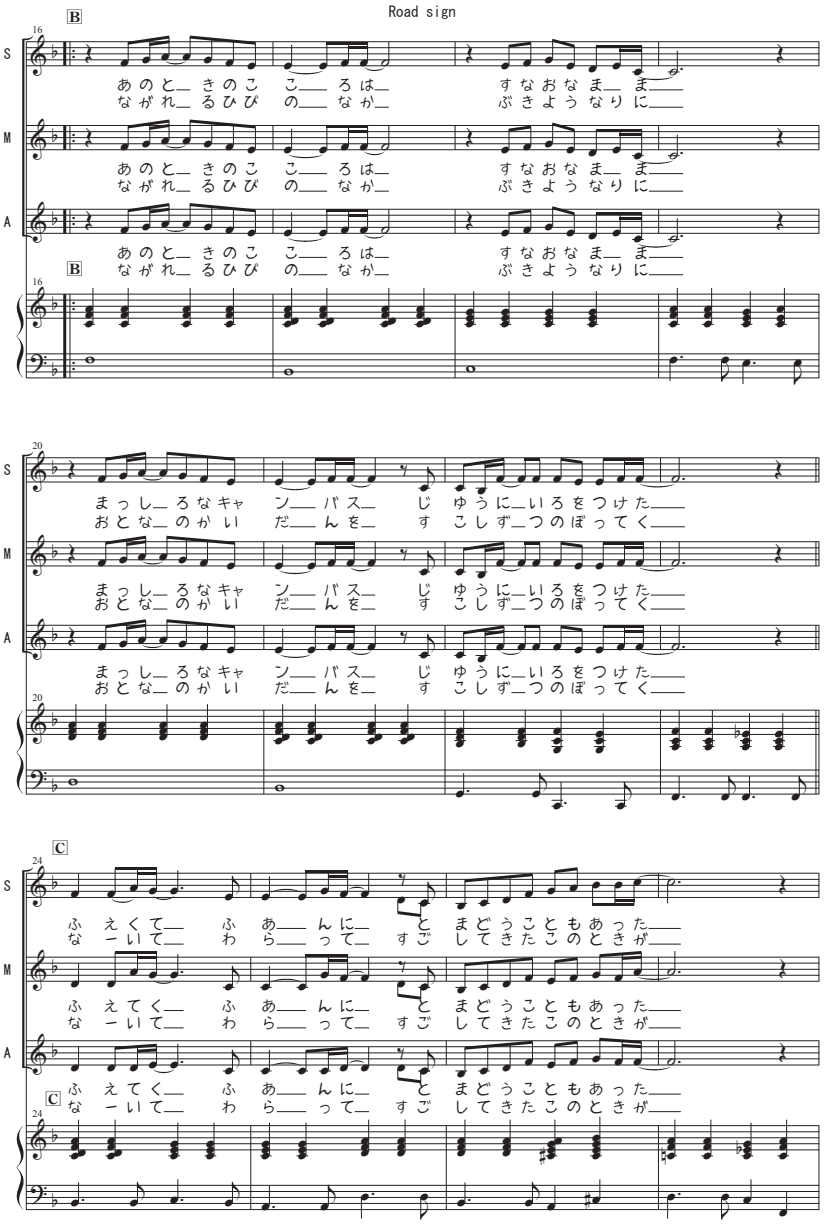
[1] 統計局「平成21年全国消費実態調査　主要耐久消費財の所有状況」より
http://www.stat.go.jp/data/zensho/2009/taikyu/gai-menu.htm

[2] ミキハウス子育て総研　ハッピー・ノート.com http://www.happy-note.com/research/10500.html

[3] 今釜亮「幼稚園の歌唱教材に関する一考察」『新時代への学校教育の展望』P89-100、中川書店、2010年。

[4] 佐藤敦子「保育者養成校におけるピアノ教育の実態と幼稚園・保育所の実習時及び採用試験時におけるピアノの実態と評価基準」『福島学院大学研究紀要第37集』P135.154、2005年。





（いまがま　りょう：幼児教育科　講師）